「動かない政治」のその先に…

政治家と有権者の意識は、いつもどこかずれている。そのずれがまた、新たなずれを呼び起こすきっかけとなるから不思議だ。

二〇〇七年秋の大連立騒動がそうだった。当時の自民党総裁、福田康夫首相と、民主党の小沢一郎代表が党首会談を行い、ひそかに大連立を協議。小沢氏は民主党幹部のほぼ全員から反対され、一度は辞任表明までする騒ぎとなった。

民主党はこの年の夏に参院選で大勝。参院第一党となり、国会は衆参の多数派がねじれた。この勢いを駆って本当に政権交代が起きるのでは…、そんな機運が高まっている矢先の冷や水。小沢氏は何を考えているのか、との失望が広がった。

両党首の二人きりのやり取りの詳細はいまだに不明だ。会談前、会場となった国会三階の常任委員長室では、盗聴器が仕掛けられていないか、テーブルやソファの裏まで入念に調べられたと言われる。政界のおどろおどろしい印象だけが残った、ように思えた。

ところが、である。この騒動によって「大連立」という政治用語が一躍ポピュラーとなってしまった。もちろんそれまでも語られてきた言葉だが、「それもありか」と国民の大きな選択肢の一つになった感じだ。

世論調査では、民主や自民の単独政権よりも、大連立政権を望む割合が一貫して高い奇妙な傾向が続く。今年四月一〇日付読売新聞の世論調査でも、大連立政権を望むのは二一％なのに対し、自民党中心は一〇％、民主党中心は六％にすぎない。

大連立とは、目指す国家像や政策の方向性の違う二大政党が一緒になることだ。有権者がそれを支持するということは、自ら選択肢をつぶすのに等しい。

それでも何となく大連立を選んでしまうのは、民主にも、自民にも期待できない。政党間の不毛な言い争いはやめて、「動く政治」を実現できる安定政権を早く誕生させてほしい―。そんな思いの裏返しだろう。

政治への失望とあきらめが、どこへ向かうか分からないエネルギーとなってたまっている。すべてをリセットしたいという感覚も強い。先に挙げた世論調査で一番多かった回答は、「政界再編による新しい枠組み」がトップで半数を超す五四％だった。

しかしここで問題なのは、大連立や政界再編までして、どんな政策実現を目指すのかの議論が抜け落ちていることだ。とにかく、膠着した政治をこれ以上見るのはたまらないという心情が、出口を求めて暴れている。

当時、小沢氏がイメージしていたのは、ドイツの大連立政権のようだ。石川知裕衆院議員の著書『悪党―小沢一郎に仕えて』（朝日新聞出版）には「これから政権交代という時に大連立なんて誰も理解できない」とたしなめた石川氏に、小沢氏が「おまえもまだ分かってないな。ドイツの例を勉強してみろ」と反論するエピソードが出てくる。

ドイツでは、一九六六年のキージンガー政権、二〇〇五年のメルケル政権の二つの大連立政権が誕生した。特に、長く政権党だったキリスト教民主同盟（ＣＤＵ）と、野党のドイツ社会民主党（ＳＰＤ）が連立したキージンガー政権の構図は、当時の自民党と民主党の関係性に似る。

大連立で政権担当能力を示した社民党は、次の総選挙後にＣＤＵを切り、社民党首班のブラント政権を誕生させた。小沢氏も当時の記者会見で「政権の一翼を担えば、政権担当能力を目に見える形で国民に示し、総選挙で勝つ可能性が高まると考えた」と語っている。

民主党に政権を担う準備がなかったことを自ら見抜いていたとも言えるが、発想の基本は権力闘争でしかない。ただ、民主党の基礎体力と期待感とのミスマッチは、結局したたかだったドイツ社民党のように解消することはできず、今に至った。

野田佳彦首相は「決まらない政治からの脱却」を掲げ、政治評論の多くは「動かない政治」へのいらだちをぶつける。だが、途中経過をすっ飛ばしたような妥協が増えていくのは不安だ。民主主義は面倒なところが良さでもある。

やっと動いた政治の先に何が起こるのか。気がついたら、とんでもない政権にフリーハンドを認めていた、なんてことだけは避けたい。

＜由＞